

きこむ」ところから生じたものと思われる。「マル共」よ
 ばわりは「派閥」が批判に対してまともに答ええないとき
 の「反論」の「常套手段」であり、彼等の反民主主義の本
 質をよく示している。また新教組組合役員選挙の際にも、
 その最終盤になると「反主流派」を「攻撃」するための「反
 共ビラ」が「主流派」によって毎年、配布される。しかし
 新潟県にまだ「根強く」残存する「反共風土」を背景に
 して、このような「反共」攻撃は多くの良心的な人々を「た
 じろ」がせ、沈黙させ、彼等の利権支配をほしのままにし、
 また新潟県における教育の民主的発展を阻止するのに「切
 札」としての役割を果たしてきた。

戦前、「ときわ会」や「公孫会」は侵略戦争と軍国主義
 教育に積極的に加担し、多くの教え子を戦場におくり、戦
 死させた。この暗黒時代には共産主義者や社会主義者のみ
 ならず、「自由主義者」や少しでも侵略戦争に反対したり、
 非協力の態度を「表明」した良心的な人々は「治安維持法
 違反」などでことごとく弾圧され、投獄された（本連載第
 四回参照）。それでも「体を張って」侵略戦争や軍国主義
 教育、また、それに加担する学閥の教育支配に反対した人
 々が新潟県の教師の先達のなかにもいたのである。

「反共風土」はこのような天皇制権力に「抵抗」するこ
 とがどれほどきびしい弾圧の対象になったかという「歴史
 の現実」と、天皇中心の「皇国史観」に根ざした「歴史の

虚構」にもとづく戦前の「教育」によって作り出された人
 々の「意識」にその源流をもっている。戦後、侵略戦争の
 反省の上になつて、教育においても憲法や教育基本法にみ
 られるような民主教育の原則が確立され、また憲法第十九
 条には「思想及び良心の自由は、これを侵してはならな
 い。」と「思想と良心の自由」が明記された。「派閥」がそ
 の批判者への「反撃」として、いまだに「反共」攻撃を常
 套手段としてしていることは、歴史と民主主義への無知とその
 後進性をよく示しているものと思われる。（つづく）

表紙絵について

東大畑通りの新潟カトリック教会。外人神父さんの熱意で
 昭和二年九月に建築されたという。この時パイプオルガンが
 入った。おそらく県で初めてではあるまいか。

空に向って背伸びをする様な二本の塔、十数メートルの先
 端には十字架。

七月に訪れた私は、不思議な感じがした。都会の真ん中に
 在って物音がしない。新潟の目抜き通りからほんのわずかに
 消防局の真後ろに位置するのに。こんもり繁る樹々には弾が
 鳴っていた。そんな中に幼稚園や保育園がある。

私は当教会の色に淡いトキ色を見つけた。空と樹木と歴史
 の色とが交錯して、微妙な光彩を放っている。

（桑名義夫）